

不登校支援における小学校養護教諭の困難感

みやけ なつみ¹・ひらい みゆき²・よしかね ちひろ³・ふじしま さちこ⁴

¹堺市立久世小学校・²総合教育系（高度教職開発部門）・

³東大阪市立長瀬北小学校・⁴大和郡山市立郡山南中学校

(2023年5月2日 受付)

(2023年11月16日 査読完了)

抄録：本研究は、不登校支援における小学校養護教諭の困難感を明らかにすることを目的とした。小学校に勤務する現職養護教諭を対象にインタビュー調査を実施し、質的記述的に分析した。その結果、小学校養護教諭は、自らが保健室で行う個別支援そのものに困難感があり、それは時に教員や保護者という個別の援助チームのメンバーからの理解が関係していた。また、不登校支援において、担任に配慮や支援をしながら養護教諭としてコーディネートし、組織の中で協働的援助につなげる困難感があった。これらの困難感を左右する養護教諭の力量を実感することにも困難感があるとわかった。

キーワード：困難感、不登校、小学校、養護教諭、支援

I はじめに

児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査¹⁾²⁾によると、不登校は小学校では9年連続で増加し、経年変化において過去最多を更新している。さらに、平成28年に義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律³⁾、平成29年には義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する基本指針⁴⁾が定められたことから、児童生徒個々の状況に応じた学びを保障するような支援を実現することが望まれている⁵⁾。小学校において、子どもに応じた学びを保障する不登校支援は、喫緊に対策を必要とする教育課題のひとつと考えられる。

学級担任が学習指導のみならず児童に寄り添い、生活面全般についての指導・援助も担当している小学校の現状について、藤井・栢森⁶⁾は、「子どもたちの苦しみ気づくことができなかったことも多くある。学級担任制である小学校では、学習指導や生徒指導など、学級のことについての裁量が、担任教師ひとりに任されていることが多い。」と述べている。不登校児童と関わった経験のある小学校教師に対するインタビュー調査でも、質的分析の過程で＜教師の自責の念や迷い＞＜児童に対する恐怖心＞＜教師の支援の逆効果＞＜教師としての限界や妥協＞が抽出されている⁷⁾。これらのことから、小学校といった校種の特徴や学級担任の役割をふまえると、学級担任は、子どもに応じた学びを保障する不登校支援を進めるうえで複雑な感情状態を強いられることが予測される。「養護教諭は、心身両面から児童生徒の健康に関わることができます。学級・ホームルーム担任や保護者との連絡を通し、不登校の早期発見や、保健室登校の提案と対応など、不登校のケースに関わる機会も多く、重要な役割を担っています。」⁵⁾とあるように、不可欠である教職員の連携・協働⁵⁾では、養護教諭が役割を発揮することに期待が寄せられている。

養護教諭の役割については、文部科学省⁸⁾が「児童生徒の健康課題を的確に早期発見し、課題に応じた支援を行うことのみならず、全ての児童生徒が生涯にわたって健康な生活を送るために必要な力を育成するための取組を、他の教職員と連携しつつ日常的に行うことが重要である。」と言及している。児童生徒の身体的不調を背景に諸問題にいち早く気付く立場であることから、健康面の指導だけでなく生徒指導面でも大きな役割

を担っている⁸⁾と理解されている。

保健室利用状況に関する調査報告書（平成28年度調査結果）⁹⁾によると、32.4%もの養護教諭が保健室登校の児童が存在すると回答している。養護教諭を対象に行われた調査でも、小学校養護教諭の不登校への対応として50%以上の回答割合を示した質問項目は「保健室登校の経験がある」が75.0%、「(所属校に望むこととして)校内外の協力者の存在」が58.3%である¹⁰⁾。保健室登校の受け入れ経験の実態から、多くの小学校養護教諭は、登校したり教室で学習したりしにくい多様な児童を日常的に支援しているとわかる。また、校内外の協力者の存在を望んでいる実態から、学級担任と同様、小学校養護教諭もまた孤軍奮闘しているのではないかと考えられる。加えて、小学校養護教諭の複数配置は10.4%という結果があることから⁹⁾、ほとんどの小学校養護教諭は、たった一人で児童を支援していることが考えられる。これらの実態をふまえると、不登校支援において小学校養護教諭は困難感を抱いていることが想像できる。

2023年4月22日現在、CiNii Researchを用いて「不登校」「小学校」「養護教諭」のキーワードで検索したところ、研究論文は8件のみ該当した。小学校養護教諭の不登校支援に特化した報告は見当たらなかった。また、養護教諭の困難感に着目し、「困難感」「養護教諭」のキーワードで検索すると研究論文が26件該当した。養護教諭の困難感は、不定愁訴・発達障害など対応時の困難感¹¹⁾¹²⁾、児童虐待対応における校内連携や保護者対応の困難感¹³⁾¹⁴⁾、救急処置過程における困難感¹⁵⁾などが代表される知見と確認した。不登校支援における小学校養護教諭の困難感は未だ明らかにされていないことがわかった。小学校において、子どもに応じた学びを保障する不登校支援を充実させるに当たり、養護教諭の困難感を明らかにすることは、教育課題の解決に直結する重要な命題であるといえよう。

そこで、本研究の目的は、不登校支援における小学校養護教諭の困難感を明らかにすることとする。小学校に勤務する現職養護教諭を対象にインタビュー調査を実施し、得られた知見を以下に報告する。

Ⅱ 方法

1. 対象

政令指定都市A市に勤務する、不登校支援経験を有する現職の小学校養護教諭9名を調査対象とした（以下、対象者とする）。

対象者の選定方法には、研究参加者を次々とみつけていく方法であるネットワーク標本抽出法を適用した¹⁶⁾。

2. 調査期間

インタビュー調査は、令和2年2月14日から3月13日の期間に行った。

3. 調査内容

インタビュー調査は、以下の調査内容を半構造化面接により実施した。

- ①小学校養護教諭としての不登校児童との関わりや経験
- ②不登校支援における小学校養護教諭の思いや考え方
- ③不登校支援における小学校養護教諭の困難感
- ④困難感を解消・改善する方法

4. 調査の手順

対象者の学校長には、依頼文書・説明文書に基づいて本研究の趣旨を口頭で説明し、研究協力の同意を得た。また、学校長には勤務校の実態を明らかにする調査ではないことを説明し、インタビューのため当該校の保健室の使用許可を得た。

対象者には、個別に、まず本研究の趣旨を口頭で説明の上、研究参加の内諾を得て面接日を決定した。次に、依頼文書・説明文書に基づいて、正式に、本研究の趣旨を口頭で説明し、研究参加の同意を得た。口頭で対象者から研究参加の意思が表明されたら、同意書への自筆署名をいただき、確実に研究参加の同意を得た。

インタビュー調査は、調査内容 4 項目について半構造化面接により行った。面接時間は 60 分以内とし、会話はすべて IC レコーダーに録音した。その録音した音声データを逐語化したテキストデータを分析対象とした。

5. 分析方法

本研究は、インタビュー調査で得られた対象者の言語データを逐語化し、テキストデータを質的記述的に分析した。本研究では「困難感」という小学校養護教諭の心情を取り扱うため、現象や現状等を含む語りの描写等に含まれるデータの本質を損なわないよう、できるだけ元データの表現を生かす抽象度でサブカテゴリーを表した。

質的記述的な分析とは、谷津¹⁶⁾は「①データを文章に起こし、全体の感覚をつかむ」「②それらを適切な長さに区切り、それらを何度も読む」「③そこに含まれる意味を発見する」「④その意味の解釈が妥当かどうかをデータやコードに戻って確認する」プロセスを踏む分析方法であると述べている。本研究では、研究疑問に対し、素直で飾りのない回答を与えるのにとりわけ適する分析¹⁶⁾であることからこの分析方法を適用した。なお、この分析過程において、質的研究経験のある学識者のスーパーバイズを受けた。また、小学校に勤務する現職養護教諭 5 名より、本分析結果に対し養護実践の現状を捉えたカテゴリー化になっているとの確認を得た。

6. 倫理的配慮

本研究は、大阪教育大学倫理委員会の承認を得て実施した（番号 493：2020 年 1 月 16 日付）。

対象者には、十分な説明と対象者の意思表示による同意を保障し、研究参加の同意を得た。対象者の時間的負担を最小限にするため、場所を対象者の所属校の保健室をお借りして実施し、面接は 60 分（説明を含めて 90 分）以内で、勤務時間外に行った。

また、対象者は、自身が経験した不登校支援における困難さを語ることになるため、心理的負担を生じる可能性がある。このことには、事前に丁寧に説明し、対象者の同意ある研究参加とすること、面接中は対象者の心身の健康状態を十分に観察すること、心身に異変がある場合はすぐに面接を中断し心理専門家に指導を仰ぐことで十分に配慮した。

7. 用語の定義

本研究において、小学校養護教諭の不登校支援とは、「不登校の未然防止、早期発見・早期対応、再発予防の全プロセスにある子どもに応じた学びを保障するために、小学校養護教諭が保健室の機能を生かして、不登校の児童一人ひとりの課題に応じ、保護者や関係者と連携・協働しながら直接的・間接的に本人を支え助けて発育・発達を促す教育活動である。」と操作的に定義した。

操作的定義に内包される「不登校の未然防止、早期発見・早期対応、再発予防の全プロセスにある」ことは公衆衛生学における予防医学の位置付け¹⁷⁾を、「子どもに応じた学びを保障する」ことは生徒指導提要（改訂版）の考え方⁵⁾を、「不登校の児童一人ひとりの課題に応じ、保護者や関係者と連携・協働しながら直接的・間接的に本人を支え助けて発育・発達を促す教育活動である」ことは養護教諭の学問知に位置づく支援の考え方¹⁸⁾を援用した。

Ⅲ 結果

対象者の経験年数（平均値±標準偏差）は、17±10.76 年であった。インタビュー時間（平均値±標準偏差）は、46±10.66 分であった。

質的記述的な分析の結果、コードが 271、サブカテゴリーが 22、カテゴリーが 6、抽出された（表 1）。なお、以下本文では、サブカテゴリーは< >、カテゴリーは【 】で括弧表記した。

表1 インタビュー調査から抽出された不登校支援における小学校養護教諭の困難感

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
【保健室を生かした養護教諭の個別支援】	<p>〈子どもにとって保健室はずっといる場所ではなく通過点であり、養護教諭は子どもを学級に返す〉</p> <p>〈養護教諭は、子どもの力を信じ、正直に子どもと話し、気持ちを聴き、一緒に考え、子どもが自分の思いを話せるようにする〉</p> <p>〈不登校や保健室登校の子どもは初期対応によって教室に戻るようになり、養護教諭が保健室をベースとして予防的に支援する〉</p> <p>〈保健室が子どもの居場所になると、養護教諭は子どもや保護者との関わりによって他の仕事が全然できない〉</p>	58
【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】	<p>〈養護教諭の支援は、教員や保護者から「保健室で子どもを甘やかしている」と思われ、誰にも相談できない〉</p> <p>〈養護教諭は、不登校担当の組織に入っていないけれど、他の先生たちは忙しいから子どもを迎えに行く〉</p> <p>〈教室に入りにくい子どもが「保健室なら行けそうだ」と保健室登校が始まるとき、担任から養護教諭に相談がない〉</p>	28
【不登校支援を行う担任への配慮と支援】	<p>〈養護教諭は、担任には保護者に連絡するように伝えたり、支援方法を教えたり、役割分担をしてフォローする〉</p> <p>〈養護教諭は担任の意向を尊重しようと遠慮するが、子どもは担任の気持ちが自分に向いていないと教室に戻れない〉</p> <p>〈担任には保健室に来て子どもの様子をこまめにみてもらい、子どもの様子について話したいが、担任と養護教諭に関係ができていないとうまくいかない〉</p> <p>〈養護教諭は、保護者や子どもから信頼を得られない担任に対し、責める気持ちになり連携がうまくいかない〉</p>	44
【個別支援につなげるコーディネーター】	<p>〈養護教諭は、保護者と話をして子どもの様子を知り、保護者のしんどさを聴き、連携することで子どもを支援する〉</p> <p>〈養護教諭は、担任と子ども・担任と保護者・子どもと子ども・子どもと特別支援学級をつなげるコーディネーターである〉</p> <p>〈養護教諭は、子どもと保護者をSCや専門家につなげ、助言をもとに子どもを支援する〉</p>	42
【組織体制における養護教諭としての協働的援助】	<p>〈不登校対策において組織や体制がない・あっても機能していない・養護教諭が組織に入っていないことがある〉</p> <p>〈保健室で子どもを預かるとき、管理職から養護教諭の関わり方への理解が得られず、支援してもらえない〉</p> <p>〈養護教諭が管理職・担任・保護者と子どもの支援について情報共有・共通理解ができないと子どもを支援しにくい〉</p> <p>〈職員会議などの全体場で情報共有がないと、誰がどのような支援をしているのかわからず、養護教諭は保健室の状況や子どもの様子を伝えられない〉</p>	64
【不登校支援を行う養護教諭としての力量】	<p>〈養護教諭の経験年数が浅く力量が乏しいと、不登校支援をしたり保護者・担任の話を聴き配慮したりすることができない〉</p> <p>〈養護教諭は、突然来なくなった子どもや、子ども理解が不十分な子どもに対してどのように支援したらいいのかわからない〉</p> <p>〈保健室で子どもが勉強するとき、養護教諭はどのように学習させ、どのように教えたらよいかかわからない〉</p> <p>〈担任・管理職との連携や子どもへの支援といった養護教諭としての不登校支援や保健室登校の勉強をする〉</p>	35

1. 各カテゴリーの構成

1-1. カテゴリー【保健室を生かした養護教諭の個別支援】

このカテゴリーは、〈子どもにとって保健室はずっといる場所ではなく通過点であり、養護教諭は子どもを学級に返す〉、〈養護教諭は、子どもの力を信じ、正直に子どもと話し、気持ちを聴き、一緒に考え、子どもが自分の思いを話せるようにする〉、〈不登校や保健室登校の子どもは初期対応によって教室に戻るようになり、養護教諭が保健室をベースとして予防的に支援する〉、〈保健室が子どもの居場所になると、養護教諭

は子どもや保護者との関わりによって他の仕事が全然できない>、という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、養護教諭が保健室の機能を生かし、多様な子ども一人ひとりに応じて支援することに困難感を示していることから、カテゴリー名を【保健室を生かした養護教諭の個別支援】とした。

1-2. カテゴリー【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】

このカテゴリーは、<養護教諭の支援は、教員や保護者から「保健室で子どもを甘やかしている」と思われ、誰にも相談できない>、<養護教諭は、不登校担当の組織に入っていないけれど、他の先生たちは忙しいから子どもを迎えに行く>、<教室に入りにくい子どもが「保健室なら行けそうだ」と保健室登校が始まるとき、担任から養護教諭に相談がない>、という3つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、養護教諭が不登校児童に個別の支援を行っている際に感じている気持ちや、実際の支援における教員や保護者からの理解の得方を意味する困難感を示していることから、カテゴリー名を【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】とした。

1-3. カテゴリー【不登校支援を行う担任への配慮と支援】

このカテゴリーは、<養護教諭は、担任には保護者に連絡するように伝えたり、支援方法を教えたり、役割分担をしてフォローする>、<養護教諭は担任の意向を尊重しようと遠慮するが、子どもは担任の気持ちが自分に向いていないと教室に戻れない>、<担任には保健室に来て子どもの様子をこまめにみてもらい、子どもの様子について話したいが、担任と養護教諭に関係ができていないとうまくいかない>、<養護教諭は、保護者や子どもから信頼を得られない担任に対し、責める気持ちになり連携がうまくいかない>、という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、養護教諭が不登校支援を行う学級担任を理解、配慮し、担任を支援する困難感が示されていることから、カテゴリー名を【不登校支援を行う担任への配慮と支援】とした。

1-4. カテゴリー【個別支援につなげるコーディネート】

このカテゴリーは、<養護教諭は、保護者と話をして子どもの様子を知り、保護者のしんどさを聴き、連携することで子どもを支援する>、<養護教諭は、担任と子ども・担任と保護者・子どもと子ども・子どもと特別支援学級をつなげるコーディネーターである>、<養護教諭は、子どもと保護者をSCや専門家につなげ、助言をもとに子どもを支援する>、という3つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、養護教諭が子どもを他者とつなげるようコーディネートし、学級担任や専門家等と共に子どもを支援する困難感が示されていることから、カテゴリー名を【個別支援につなげるためのコーディネート】とした。

1-5. カテゴリー【組織体制における養護教諭としての協働的援助】

このカテゴリーは、<不登校対策において組織や体制がない・あっても機能していない・養護教諭が組織に入っていないことがある>、<保健室で子どもを預かるとき、管理職から養護教諭の関わり方への理解が得られず、支援してもらえない>、<養護教諭が管理職・担任・保護者と子どもの支援について情報共有・共通理解ができないと子どもを支援しにくい>、<職員会議などの全体場で情報共有がないと、誰がどのような支援をしているのかわからず、養護教諭は保健室の状況や子どもの様子を伝えられない>、という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、不登校支援の組織体制における養護教諭の参画や協働的援助の困難感が示されていることから、カテゴリー名を【組織体制における養護教諭としての協働的援助】とした。

1-6. カテゴリー【不登校支援を行う養護教諭としての力量】

このカテゴリーは、<養護教諭の経験年数が浅く力量が乏しいと、不登校支援をしたり保護者・担任の話を聴き配慮したりすることができない>、<養護教諭は、突然来なくなった子どもや、子ども理解が不十分な子

どもに対してどのように支援したらいいのかわからない>、<保健室で子どもが勉強するとき、養護教諭はどのように学習させ、どのように教えたらいいかかわからない>、<担任・管理職との連携や子どもへの支援といった養護教諭としての不登校支援や保健室登校の勉強をする>、という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

これらのサブカテゴリーは、不登校支援における養護教諭の力量に関わる困難感を示していることから、カテゴリー名を【不登校支援を行う養護教諭としての力量】とした。

IV 考察

インタビュー調査の結果、6つのカテゴリーが抽出された。抽出されたカテゴリーをもとに、不登校支援における小学校養護教諭の困難感について考察する。

小学校養護教諭は、不登校支援において【保健室を生かした養護教諭の個別支援】を実践する困難感があると明らかになった。実際、保健室には、1日平均22.0人の「けがの手当て」、「委員会活動」、「体調が悪い」といった理由による来室がある⁹⁾。健康診断や保健指導を実施している際は、個別支援を実施することが難しい状況であるため、養護教諭がさまざまな理由で来室する児童を支援しながら保健室での不登校児童への個別支援を行うことそのものに困難感があると考えられる。

こうした多様な個別支援を実践する過程で、【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】の得られ方にも困難感があつた。このことは、教員や保護者という個別の援助チーム¹⁹⁾のメンバーになる可能性がある者の理解が関係していると考えられる。経験が浅い養護教諭の仕事に対する意義感の醸成は、組織の中で尊重されているという意識をもつことが必要と推察されている²⁰⁾。教員や保護者から理解が得られにくいと感じる小学校養護教諭としての困難さは、仕事に対する意義感を持ちにくいことにもつながる可能性が考えられる。

【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】に関する困難感は、【不登校支援を行う担任への配慮と支援】に関する困難感にもつながるのではないかと考えられた。養護教諭は不登校支援を行う担任から理解が得られないと感じる困難さがある中で、養護教諭が担任の考えを尊重し、言動に配慮し、担任を支援することもある²¹⁾。すなわち、小学校養護教諭には、担任との関わりにおいて感情的には不満や憤りを感じても、それを表出せず、担任に配慮したり支援したりしなければならない困難感があると考えられる。担任への配慮や支援における困難感があることは、学級担任制を導入している校種の特徴をふまえた小学校養護教諭ならではの困難感ではないかと考えられる。

さらに、【個別支援につなげるコーディネート】や【組織体制における養護教諭としての協働的援助】といった困難感が明らかになった。コーディネートとは、「個人や組織等、異なる立場や役割の特性を引き出し、調和させ、それぞれが効果的に機能しつつ、目標に向かって全体の取り組みが有機的、総合的に行えるように連絡・調整を図ることである。」¹⁸⁾と定義されている。養護教諭のコーディネートは、学校の組織体制における協働的援助を促進する手掛かりになると考えられる。不登校支援において組織体制が整備されていなければ、養護教諭はコーディネートを中心とする専門職としての役割を果たせず、機能的な協働的援助を阻害する可能性もあり、養護教諭にとってコーディネートや協働的援助を実践するための体制が整備されにくい状況から、困難感を感じるだろう。

組織体制をいかに整備しうるかを考えると、否応なく【不登校支援を行う養護教諭としての力量】に直面させられることへの困難感もあるだろうと考えられた。保健室登校を受け入れる際の養護教諭の悩みとして、「マンツーマン対応であるため、その子から目が離せないことや、支援計画がないことから見通しなく対応していることへの不安を感じたり、他の保健室来室児童への説明が難しいといったことがあげられていた。」と小野ら¹⁰⁾が述べているように、養護教諭は実際に、どのように子どもに合った個別支援を行えば良いか、どのように担任や保護者とつながりコーディネートして協働的援助につなげれば良いか、という困難さを実感する。こうした困難感を生じることは、自らが力量のなさを追及することにもなると考えられる。

不登校支援における小学校養護教諭の困難感は、保健室で行う個別支援そのものの困難さがあり、それは時に教員や保護者という個別の援助チームのメンバーになる可能性がある者の理解が関係していた。また、不登

校支援において、担任に配慮や支援をしながら養護教諭としてコーディネートし、組織の中で協働的援助につなげる困難感もあった。これらの困難感を左右する養護教諭の力量を実感することにも困難感があると考えられた。

これらをふまえて、小学校養護教諭が不登校支援における困難感を改善するためには、小学校養護教諭自身が同僚の教職員や保護者の理解を得て、担任への配慮や支援をしながら不登校児童を支援している実態を発信できるとよいだろう。しかしながら、孤軍奮闘する養護教諭にとって、自らの実態やその困難さを発信することにも困難感を伴う恐れがある。そのため、まずは管理職が教職員の職種や職務の実態を知り、小学校において不登校支援するための組織体制を整備することが、養護教諭の困難感を緩和する手立てになるだろう。また、小学校養護教諭が自らの実態やその困難感を発信するには、担任との関係が協働的であることも必要だろう。例えば、不登校児童の支援において担任から養護教諭に過度な期待があったり、保健室に依存的な役割や機能を委ねられたりすると、養護教諭の困難感が高まるばかりである。こうした学校内の組織体制や担任との協働的な関係性があれば、小学校養護教諭は自らの実践を省察する際に同僚の教職員と相互に意見交換することができ、専門性を有する固有の職にあっても、保健室を生かして不登校児童を支援する力量を高めていくことができると考えられる。したがって、小学校という校種と教職員の専門性を考慮した学校マネジメント、担任と養護教諭の協働的な関係を基盤とする支援チームの形成という方向性が異なる手立ては、小学校養護教諭の困難感の改善をもたらし、ひいては、子どもに応じた学びを保障する不登校支援の充実にもつながるのではないかと考えられる。

V 結論

本研究は、不登校支援における小学校養護教諭の困難感について明らかにするために、現職養護教諭を対象にインタビュー調査を実施した結果、コード 271、サブカテゴリー 22、カテゴリー 6 が抽出された。不登校支援における小学校養護教諭の困難感とは、【保健室を生かした養護教諭の個別支援】【養護教諭の個別支援に対する教員・保護者の理解】【不登校支援を行う担任への配慮と支援】【個別支援につなげるコーディネート】【組織体制における養護教諭としての協働的援助】【不登校支援を行う養護教諭としての力量】のカテゴリーが明らかになった。

不登校支援における小学校養護教諭の困難感とは、保健室で行う個別支援そのものにあった。それは、教員や保護者という個別の援助チームのメンバーからの理解や、担任に配慮や支援をすること、組織の中で養護教諭としてコーディネートしながら協働的援助につなげることに関係していた。これらの困難感を左右する養護教諭の力量を実感することにも困難感があった。不登校支援において養護教諭は、養護教諭固有の専門性に立脚した前向きな支援の内奥に、あらゆる面への困難さを感じると示唆された。子どもに応じた学びを保障する不登校支援の充実において、小学校養護教諭に不登校支援の困難感があることを教職員など関係者が知り、改善を検討することは必須といえよう。

謝辞

本研究のインタビュー調査にご協力いただきました皆様に厚く感謝申し上げます。

付記

本研究は、大阪教育大学大学院連合教職実践研究科（専門職学位課程）に提出した実践課題研究報告書の一部を改変し、取りまとめたものである。また、日本養護教諭教育学会第 29 回学術集会（徳島文理大学によるオンライン開催）において、「小学校養護教諭の困難感からみた不登校支援の探究」の表題で、本稿の一部を発表した。

文献

- 1) 文部科学省：令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について，
https://www.mext.go.jp/content/20211008-mext_jidou01-100002753_01.pdf（アクセス年月日：2023年4月23日）
- 2) 文部科学省：令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について，
https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf（アクセス年月日：2023年4月23日）
- 3) 文部科学省：義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律，
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1380956.htm（アクセス年月日：2023年4月23日）
- 4) 文部科学省：義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する基本指針，
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2017/04/17/1384371_1.pdf（アクセス年月日：2023年4月23日）
- 5) 文部科学省：生徒指導提要（改訂版），
https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf（アクセス年月日：2023年4月23日）
- 6) 藤井俊・栢森和重：小学校における同僚性に基づいた教師間連携の研究，三重大学教育学部研究紀要，73，453-465，2022
- 7) 梅津彩・堀井俊章：不登校児童と関わった経験のある小学校教師の成長や変化，横浜国立大学教育学部紀要Ⅰ教育科学，194-207，2020
- 8) 文部科学省：現代的健康課題を抱える子供たちへの支援－養護教諭の役割を中心として－，2017
- 9) 公益財団法人日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査報告書（平成28年度調査結果），2018
- 10) 小野昌彦・生田周二・北村陽英 他：奈良県におけるいじめ・不登校に関する教育臨床的研究Ⅱ－養護教諭を対象として－，教育実践総合センター研究紀要，283-288，2007
- 11) 松永恵・庄司一子：養護教諭が子どもの不定愁訴に対応する際の困難感の検討，学校保健研究，64（3），226-234，2022
- 12) 大江佳奈・佐藤幸子・今田志保：通常学級に在籍する発達障害児の健康診断における養護教諭の困難感と工夫，山形医学，39（2），130-137，2021
- 13) 青柳千春・阿久澤智恵子・町田大輔 他：小・中学校に勤務する養護教諭の児童虐待対応の現状と校内連携を図る際の困難感，日本養護教諭教育学会誌，22（2），3-13，2019
- 14) 青柳千春・阿久澤智恵子・金泉志保美 他：児童虐待疑い事例の保護者対応における養護教諭の困難感の検討，小児保健研究，74（3），366-374，2015
- 15) 細丸陽加・三村由香里・松枝睦美 他：養護教諭の救急処置過程における困難感について－外傷に対しての検討－，57（5），238-245，2015
- 16) 谷津裕子：Start Up 質的看護研究（第2版），学研メディカル秀潤社，2015
- 17) 武藤孝司：公衆衛生学における予防医学の位置づけと予防活動，Dokkyo journal of medical sciences，37（3），207-216，2010
- 18) 日本養護教諭教育学会「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集＜第二版＞」改訂WGメンバー：養護教諭の専門領域に関する用語の解説集＜第三版＞，日本養護教諭教育学会，2019
- 19) 水野治久：子どもと教師のための「チーム援助」の進め方，金子書房，2014
- 20) 鎌塚優子・籠谷恵・満下健太 他：養護教諭の年代層別キャリア形成に及ぼす要因の検討：仕事内容・組織風土の認知がキャリア形成意識へ及ぼす影響に着目して，静岡大学教育学部附属教育実践総合センター，32，102-18，2022
- 21) 吉兼千尋・平井美幸・藤嶋祥子 他：学級集団づくりにつなげる小学校養護教諭の担任支援，大阪教育大学紀要総合教育科学，71，243-255，2023

The Difficulties of Elementary School *Yogo* Teachers in Supporting Non-Attending StudentsMIYAKE, Natsumi¹, HIRAI, Miyuki², YOSHIKANE, Chihiro³, and FUJISHIMA, Sachiko⁴¹Sakai Municipal Kuze Elementary School²Division of General Education, Osaka Kyoiku University³Higashiosaka Municipal Nagasekita Elementary School⁴Yamatokoriyama Municipal Koriyamaminami Junior High School

Summary: The aim of this study was to identify the difficulties of elementary school *yogo* teachers in supporting non-attending students. It should be ensured that learning is tailored to the needs of individual child, and the support for non-attending children is part of it. An interview survey was conducted with in-service *yogo* teachers working in elementary schools and analysed qualitatively and descriptively. The results showed that the elementary school *yogo* teachers had a sense of difficulty with the individual support themselves in the school health room, which was sometimes related to the understanding of the individual support team members - teachers and parents. In addition, there was a sense of difficulty in providing support for non-attending students at school, while giving consideration and support to the homeroom teacher and coordinating collaborative assistance as a *yogo* teacher within the organisation. It was found that there was also a sense of difficulty in realising the competence of the *yogo* teacher, which influenced these difficulties.

keywords: difficulties, non-attending student at school, elementary school, *yogo* teacher, support